

## ISO/IEC JTC1 SC31 (電子タグ、他) の近況報告

## SC31の最近の活動と取り巻く環境

JTC 1 SC31は、今年で、SC活動10年目を迎えた。発足以来委員会を率いてきたAlan Haberman氏が昨年度の総会を最後に引退し、後任としてChuck Biss氏(米国: Hand Held Products社副社長)が新しい議長として活動を進めている。SC31が担当するAIDC (Automatic Identification and Data Capture: 自動認識及びデータ取得技術)は、設立当初のバーコード、2次元コードの標準化から次第に範囲を拡大し、現在は、バーコードに代わる次世代デバイスとして注目を集めているRFID (電子タグ)の技術標準及び関連標準の審議に多くの力を注いでいる。

SC31は、5つのWG (ワーキンググループ)で構成されている。WG1はバーコード及び2次元シンボルの標準化を、WG2はデータキャリアへのデータ格納方法(データストラクチャ)、WG3はバーコードやRFIDのコンフォーマンス・パフォーマンス標準、WG4はRFID、WG5はRTLS (Real Time Location System)をそれぞれ担当している。SC31の幹事国は米国であるが、日本はWG2およびWG4/SG5のコンビーナを担当している。

RFIDの技術規格は、SC31が審議し制定してきたが、日本からは、関連の規格提案としてWG4/SG1が担当するRFIDミドルウェア規格のパート分割を2006年に提案し、採択されて現在審議が行われている。この7月には、日本でWG4/SG1会議が開催される。

また、WG2では、RFID等へ書き込むユニーク識別子の一つとして2005年の秋に提案した「ロット製品管理用のユニーク識別子」が、2007年5月にFDIS投票をパスし、6月に国際標準として発行された。

## 最近の主要国際会議から

## (1) SC31総会

SC31の2007年総会は、6月8日にプレトリア(南アフリカ)で開催された。昨年のモスクワに引き続いてSC31としては、欧米を離れた地域での開催であった。遠隔地での開催にもかかわらず、SC31傘下の各WG、SGの会議も同時開催され、4日から8日まで連日国際会

議が開催された。気候的には乾季のはずであったが、5日夜から6日朝にかけて、雷を伴う大雨が降り、地元新聞の1面に季節外れの雨という記事が載るような状況もあり、世界的な異常気象は、このアフリカの地も同様かとの感を抱かせた。SC31総会は、以下の写真に見るように、16ヶ国3団体・50名に迫る多くの参加があった。日本からは、柴田SC31国内委員長、経済産業省・遠藤係長、吉岡WG2コンビーナなど6名が出席した。

総会の議事は、①各WGの活動報告、②各国の活動報告、③提案、検討事項審議、④2007年の活動プラン、⑤リエゾン報告といった内容であった。

各国の活動報告において、日本からは経済産業省・遠藤係長が、日本におけるRFID普及推進のための各種施策の状況と、これからのSC31の取り組みへの要望として、「多様になっているAIDCメディアを有効かつ効率的に運用していくためのガイドラインの作成」を求めた。

この作業については、SC31/WG2会議でも日本から提案・検討され、総会決議文の中に、日本からの寄稿を受けての検討と、NP提案への支持が記載された。

もう一つの大きな動きとしては、モバイルRFIDに関して検討するAd hoc会議の設置が決められたことである。これは、携帯電話などのような、一般の人が持ち歩く機器にRFIDリーダーなどが組み込まれ、生活のさまざまなシーンでRFIDを読み取り、Webサービス等を通じて情報の確認、データ入手を可能とする応用を想定しての新たな規格を検討するものである。第1回のAd hoc会議は、11月にソウルで開催の予定である。

2008年のSC31総会は、トロントで開催される。



写真1. SC31総会・吉岡コンビーナのWG2活動報告



写真 2. WG4プレトリア会議

## (2) WG4会議 (RFID)

2008年最初のWG4会議は、SC31と同様プレトリア（南アフリカ）で開催された。

この会議では、SC31総会の項でも述べたモバイルRFIDの検討とともに、最近多くの関心を集めている電磁波が人体に与える影響への対応策が検討された。結論として、〈RF（電界、磁界）を出す全てのデバイスのコンFORMANCE規格に、「本規格に適合することを要求するデバイス製造者は、RF放射（emission）が、IEEE C95.1: 2005か、IEC 62369-1に従うICNIRPで規定される最大暴露限界許容値を超えないことを製造者自らが示さなければならない。」と注記した章を含めるべき〉とJTC1に求めることとなった。

## 日本からの新規作業項目提案

### (1) 各種AIDCメディアのデータ構造の整合

AIDCメディアとして利用されているものとしては、バーコード、2次元コードが一般的である。これらに加えて、近年RFIDがその地位を拡大しつつある。

各メディアにはそれぞれの特性を生かした形でデータがエンコードされ、表示あるいはメモリに格納される。その際のデータ構造に関しては、ISO/IEC 15434：大容量AIDCメディアのためのシンタックスという規格がある。ところが、RFIDはその技術規格審議の中で、15434とは必ずしも整合しないデータ構造仕様が規格化されてきた経過がある。

さまざまなAIDCメディアが産業界、社会生活の中で使われるようになった現在、これらのメディアに間

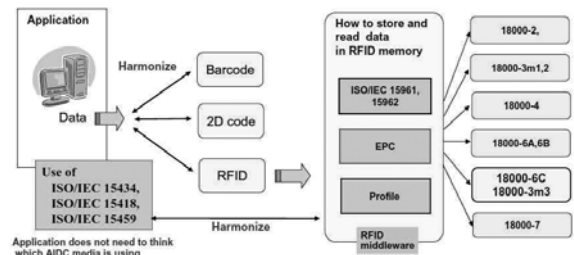


図 1. 各種AIDCメディアの協調利用に向けて

違いなくデータを書き込み／利用する方法を再度整理し、ガイドライン等を発行することが、RFID及び関連AIDCメディアの更なる高度利用において必要な状況になっていることをWG2及びSC31で説明し、出席者の賛同を得た。今後、かなりの時間を要する作業になると思われるが、各国の協力を得て推進していく予定である。

### (2) ハイブリッドメディアへの書き換え可能表示の品質試験仕様

RFID等を利用するにあたり、目視情報の補足記載は必須なことである。RFIDは内容の書き換えが可能なのが特徴である。よって、目視情報も書き換え可能な技術での表示が必要となる。このような書き換え可能な表示技術でバーコード、2次元コードを印刷した場合の表示品質の評価についても新規提案を行っている。

## 今後の課題

SC31全体の取り組みテーマの中で、エアインタフェース等の技術規格は、5年を経ずに改訂審議がスタートしている。これは、技術革新とユーザ要望の変化がめまぐるしいことの表れでもあり、最新の技術が標準に生かされ、より良い製品が生み出されていくためにも有効であり、さらに活動をスピードアップさせていくことが求められている。また、RFIDに関する標準化審議では、EPCglobalのように同種の規格を民間団体等が活発に開発している状況もあり、ミドルウェアに関係する審議では調整のため審議プロジェクトの期間延長といった状況も生まれている。審議における関係TC、SC、諸団体との密接・迅速な連携と情報交換が課題としてクローズアップされてきている。